

運や能力, 将来の出来事に対する自己評価, 一般的他者への評価の相対的比較 — 繰り返し測定による相対的自己高揚傾向の安定性 —

筑波大学心理学系 宮本 聡介

A relative comparison of evaluations concerning fortune, ability and future prospects in respect of self and generalized others: Stability in relative self-enhancement over repeated measures.

Sousuke Miyamoto (*Institute of Psychology, University of Tsukuba 305-8572, Japan*)

The purpose of this study was firstly to replicate findings concerning relative self-enhancement (Miyamoto & Kamise, 1997), and secondly to investigate the stability of this relative self-enhancement and the existence of differences due to gender. Participants were asked to evaluate the fortunes, abilities, and future prospects of self and generalized others twice during a two-month period (first session and second session). Derived by subtracting scores for generalized others from scores for self, most difference scores were positive, and an analysis of these showed that they were significantly higher than zero. In addition, the difference scores from the first session correlated highly with difference scores from the second session. Differences due to gender were not detected. This clearly replicates the earlier finding concerning relative self-enhancement. It also indicates that relative self-enhancement is stable during a two month period.

Key words: self evaluation, self-enhancement, stability, sex difference

本研究では、運・能力、将来の出来事に対する自己評価と一般的他者への評価を比較することで、Brown(1986)や宮本・上瀬(1997)が報告した相対的自己高揚を本研究において追試すると同時に、相対的自己高揚の性差、2ヶ月という間隔を空けた相対的自己高揚の変化の安定性を明らかにすることを目的とする。

Taylor & Brown(1988)に端を発した肯定的幻想(positive illusion)という現象は、それ以前にあった「自己に対する正確な認識」こそが社会適応的であるとする知見(Jahoda, 1958, Allport, 1955; Erikson, 1950; Maslow, 1950; Fromm, 1955)を根底から覆すものとなり、アメリカのみならず日本においても一大論争のきっかけとなった(遠藤, 1995)。彼女らの中心的な論点は、人間の情報処理は経験や感情状

態、既存の知識などによって、容易に「歪む」ことから(Fiske & Taylor, 1984; Nisbett & Ross, 1980)、自己概念もポジティブに歪んでいるのではないかとということにある。そしてこうした自己へのポジティブな歪みを肯定的幻想と呼び(1)自分自身を非現実的なまでにポジティブにとらえること、(2)外界に対する自己の統制力を過大評価すること、(3)自己の将来をばら色に描くことの3つをその特徴としている。こうした肯定的な歪みが単に自己の特徴を記述することにとどまらず、肯定的に歪んでいるということが精神的な健康と密接に結びついているのではないかという主張があったからこそ、彼女らの主張が多く研究者の注目を集めたことはいうまでもない。Taylor & Brownはこうした特徴を指摘するために非常に多くの研究をレビューしているが、その

中でも特にこの肯定的幻想を強調するきっかけとなったのがBrown(1986)である。

Brown(1986)は10個のポジティブな特性形容詞と10個のネガティブな特性形容詞が「自分」(あるいは「大部分の他者」)に当てはまるかどうかを7ポイントスケールで尋ね、その得点を比較した。その結果ポジティブ特性語では自己評価が大部分の他者への評価よりも有意に高いことが示された。同様にネガティブ特性語では、自分よりも大部分の他者を有意に否定的に評価していた。このことから人は、「大部分の他者」といった漠然とした相手との相対的比較において自己を極端に高く評価する相対的自己高揚の傾向があると言える。

また宮本・上瀬(1997)は運・能力、将来の出来事に対する、自己評価と一般的他者への評価を比較したところ、金銭獲得に対する期待(たとえば「宝くじで大金が手に入ると思う」「懸賞にあたると思う」)では相対的自己高揚は認められなかったが、それ以外の評価(運、将来に対するポジティブな評価)では相対的自己高揚がみられた。また宮本・上瀬らの研究ではこのような相対的自己高揚が自尊心、自己効力感などと正の相関があり、抑うつ感情と負の相関があることも示されている。つまり自己に対する極端な肯定視が精神的健康と関連を持っていることが示唆されたことになり、Taylor & Brown(1988)の主張と一致するところである。

ところで日本においては自己肯定的な評価傾向を示した研究は少なく、むしろ自己否定的な評価傾向を示すことのほうが多い。たとえば北山・高木・松本(1995)は成功と失敗の原因帰属を扱った日本の研究をレビューし、成功・失敗時の能力への帰属の傾向をまとめたところ、実験室実験では多くの場合失敗時にその原因を自分の能力に帰属する傾向があることを報告している。こうしたことから、日本人における自己肯定視の傾向に対する知見は、混沌としており、むしろ否定的な立場をとる研究者も多いと考えられる。しかし宮本・上瀬やBrownの相対的比較パラダイムを用いると、極端な自己肯定視の傾向が確認されるということは、帰属研究などでとられる方法とは、測定されている概念が異なる可能性があり、日本人において自己肯定傾向が認められないとする結論を出すのは早急であると考えられる。また実験室場面でも匿名的な課題遂行場面を用いると失敗時に能力に帰属する傾向が薄れ、むしろ成功時に能力に帰属する傾向も見られるようになる(古城, 1980)。そこで本研究では相対的自己高揚の傾向が再び確認されるかどうかを検証することを第1の目的とする。これは先の帰属研究では自己肯定的傾向

の結果が一貫していないが、相対的比較の方法において一貫した結果が得られるのかどうかを明らかにすることに問題の焦点が当てられている。もし本研究において宮本・上瀬の結果が再現されたならば、日本人における自己肯定的傾向あるいは、他者と比べた場合の相対的自己高揚傾向が確認されることになり、同時にこうした自己高揚傾向が精神的健康と関連していることから、今後健康心理学的な観点から自己の問題を検証する際の重要な個人内変数の1つとなりうるからである。

ところで、宮本・上瀬においては相対的自己高揚が自尊感情や抑うつと関連していることを報告しているわけであるが、自尊感情も抑うつも環境や状況の影響を受けてある程度変動するものと考えられる。しかしたとえば自尊感情については近年、個人の内的特性であり、高自尊心者、低自尊心者が持つ特徴的な自己概念維持の方略を報告する研究も増えてきている(伊藤, 1998)。とすると、本研究で問題にしている相対的自己高揚についても、環境や状況を超えた一貫性の傾向が認められる可能性があると考えられる。そこで本研究では宮本・上瀬において報告された相対的自己高揚傾向が繰り返しの測定によってどれだけ安定した個人内の傾向であるかを明らかにすることを第2の目的とする。

さらにBrown(1986)、宮本・上瀬(1997)のいずれにおいても性差に関する報告はなされていない。そこで本研究では相対的自己高揚の性差についてもあわせて検討する。

方 法

被験者 調査1：都内某国立大学大学生計157名(男性109名、女性48名)。調査2：同大学大学生計152名(男性104名、女性48名)。

質問紙の構成 自己他者評定尺度：現在の能力や運、将来起こるであろう出来事20項目に対し、「あなたは」と「一般的に人は」の2側面から回答を求めた。本尺度は宮本・上瀬の作成したポジティブ幻想尺度15項目のうち13項目を用い、7項目を新たに付け加えた。宮本・上瀬で用い本研究で用いなかった2項目のうち「ガンにならないと思いますか」は被験者の縁者にガン罹患者がいるということが回答に影響を与える可能性があったこと、また「就職がうまくいくと思いますか」は回答者に1～3年生が多く、就職に対する十分なイメージが出来上がっていないことが予想されたため、それぞれ「大きな病気にならないと思いますか」「希望の進路に進めるとと思いますか」とワーディングを変更して用いた。

さらに本研究では身体的魅力などの項目、将来の出来事に対する項目の不足分を考慮し5項目を追加した。追加した5項目は「幸せな老後がすごせると思っていますか」「生涯友人に恵まれると思えますか」「自分(一般的には)魅力があると思えますか」「幸福な結婚ができると思えますか」「出世できると思えますか」であった。被験者にはそれぞれの項目に対して「非常にそう思う」から「まったくそう思わない」までの7件法で回答させ、得点が高いほど肯定的な評価になるよう得点化した。

手続き 質問紙は授業時間中に配布し回答を求めた。同一内容の質問項目を2ヶ月の間隔を空けて2度実施した(調査1, 調査2)。

結果

相対的自己高揚

調査1と調査2それぞれについて、自己評価と一般的他者への評価の平均値および差得点(一般的他者への評価値を自己評価値から引いた値)をTable 1, Table 2に示す。いずれの調査においても「宝くじで大金が当たると思えますか」「85歳過ぎまで生きると思えますか」「将来大金を手に入れる可能性があると思えますか」「懸賞に当たると思えますか」の4項目の自己評価が中点となる4ポイントを

下回っているが、それ以外の項目では自己評価が4ポイントを上回っており、自己に対する肯定的な評価がされていた。一方一般的他者に対する評価では、平均値が4ポイントを超えた項目は調査1, 調査2ともに9項目と自己に対する評定よりもネガティブな評価となっていることがわかる。差得点に対して0を帰無仮説としたt検定を行ったところ、調査1では20項目中14項目で自己が有意に肯定的に評価され、調査2でも20項目中13項目で自己が有意に肯定的に評価されていた。

また両調査とも「宝くじで大金が当たると思えますか」「自分は魅力があると思えますか」「自分に何か才能があると思えますか」「85歳過ぎまで生きると思えますか」「懸賞にあたると思えますか」の5項目で自己よりも一般的他者をポジティブに評価しており。調査1では「宝くじで大金が当たると思えますか」「85歳過ぎまで生きると思えますか」の3項目で、また調査2では先の3項目に「自分に何か才能があると思えますか」を加えた4項目で、自己よりも一般的他者を有意に高く評定していた。

宮本・上瀬(1997)では「宝くじで大金が当たると思えますか」「懸賞にあたると思えますか」「将来大金を手に入れる可能性があると思えますか」「85歳過ぎまで生きると思えますか」の4項目で自己よりも一般的他者を有意に高く評価していたが、他の項

Table 1 自己他者評定尺度(調査1)における自己・一般的他者評定とその差得点の平均値(N=157)

	自己		一般的他者		差得点		t
	MEANS	(S.D.)	MEANS	(S.D.)	MEANS	(S.D.)	
将来マイホームがもてると思えますか	5.16	(1.49)	4.11	(1.05)	1.04	(1.68)	7.87 ***
宝くじで大金が当たると思えますか	2.37	(1.47)	2.65	(1.20)	-0.28	(1.55)	2.29 .
幸せな老後を過ごせると思えますか	4.59	(1.31)	3.91	(1.07)	0.68	(1.48)	5.85 ***
希望の進路に進めると思えますか	4.78	(1.12)	3.47	(0.97)	1.31	(1.38)	12.05 ***
生涯友人に恵まれると思えますか	5.02	(1.29)	4.38	(0.92)	0.65	(1.58)	5.19 ***
自分は魅力があると思えますか	4.25	(1.39)	4.69	(1.10)	-0.43	(1.78)	3.07 **
何でもやればできると思えますか	4.71	(1.52)	4.19	(1.42)	0.52	(1.66)	3.98 ***
結婚後5年以内に離婚すると思えますか	5.19	(1.38)	4.74	(0.93)	0.45	(1.66)	3.43 ***
幸せな結婚ができると思えますか	4.63	(1.39)	4.17	(0.96)	0.46	(1.65)	3.50 ***
才能のある子供に恵まれると思えますか	4.30	(1.20)	3.73	(0.98)	0.58	(1.35)	5.41 ***
恵まれていると思えますか	5.49	(1.23)	4.11	(1.01)	1.38	(1.53)	11.41 ***
自分に何か才能があると思えますか	4.61	(1.43)	4.76	(1.26)	-0.15	(1.85)	1.02
運がいいと思えますか	4.44	(1.54)	3.88	(0.86)	0.58	(1.72)	4.26 ***
カンが鋭いほうだと思えますか	4.22	(1.64)	3.92	(0.96)	0.31	(1.91)	2.07 .
大きな病気にかからないと思えますか	4.31	(1.63)	3.66	(1.14)	0.69	(1.79)	4.84 ***
85歳過ぎまで生きると思えますか	3.22	(1.65)	3.74	(1.14)	-0.52	(1.97)	3.33 **
将来大金を手に入れる可能性があると思えますか	3.86	(1.56)	3.43	(1.08)	0.43	(1.84)	3.00 **
将来自分が交通事故の加害者になることがあると思えますか	4.29	(1.32)	4.07	(1.12)	0.21	(1.52)	1.77 +
出世できると思えますか	4.45	(1.29)	3.80	(0.84)	0.66	(1.52)	5.51 ***
懸賞にあたると思えますか	3.35	(1.55)	3.53	(1.23)	-0.18	(1.50)	1.53

***: $p < .001$, **: $p < .01$, *: $p < .05$, +: $p < .1$

Table 2 自己他者評定尺度(調査2)における自己・一般的他者評定とその差得点の平均値(N=152)

	自己		一般的他者		差得点		t
	MEANS	(S.D.)	MEANS	(S.D.)	MEANS	(S.D.)	
将来マイホームがもてると思いますか	4.99	(1.25)	4.05	(1.04)	0.94	(1.40)	8.28 ***
宝くじで大金があたると思いますか	2.38	(1.25)	2.70	(1.04)	-0.32	(1.30)	3.00 **
幸せな老後を過ごせると思いますか	4.67	(1.25)	3.93	(0.96)	0.74	(1.44)	6.29 ***
希望の進路に進めると思いますか	4.80	(1.01)	3.59	(0.98)	1.21	(1.41)	10.53 ***
生涯友人に恵まれると思いますか	4.95	(1.18)	4.40	(0.92)	0.56	(1.37)	5.03 ***
自分は魅力があると思いますか	4.27	(1.27)	4.69	(1.09)	-0.44	(1.54)	3.50 **
何でもやればできると思いますか	4.76	(1.41)	4.43	(1.29)	0.34	(1.22)	3.40 ***
結婚後5年以内に離婚すると思いますか*	5.26	(1.26)	4.70	(0.93)	0.55	(1.50)	4.52 ***
幸せな結婚ができると思いますか	4.68	(1.19)	4.28	(0.76)	0.40	(1.33)	3.73 ***
才能のある子供に恵まれると思いますか	4.20	(1.11)	3.79	(0.81)	0.43	(1.18)	4.42 ***
恵まれていると思いますか	5.44	(1.17)	4.22	(0.95)	1.23	(1.42)	10.60 ***
自分に何か才能があると思いますか	4.55	(1.44)	4.92	(1.16)	-0.38	(1.75)	2.70 **
運がいいと思いますか	4.55	(1.50)	3.97	(0.76)	0.59	(1.62)	4.48 ***
カンが鋭いほうだと思いますか	4.18	(1.53)	3.87	(0.82)	0.30	(1.70)	2.15 *
大きな病気にかからないと思いますか	4.03	(1.51)	3.71	(0.94)	0.33	(1.54)	2.65 **
85歳過ぎまで生きると思いますか	3.27	(1.35)	3.56	(1.00)	-0.28	(1.54)	2.27 *
将来大金を手に入れる可能性があると思いますか	3.77	(1.25)	3.58	(1.04)	0.17	(1.45)	1.45
将来自分が交通事故の加害者になることがあると思いますか	4.14	(1.02)	4.01	(1.07)	0.15	(1.28)	1.41
出世できると思いますか	4.18	(1.14)	3.93	(0.78)	0.25	(1.38)	2.19 *
懸賞にあたると思いますか	3.38	(1.40)	3.44	(1.02)	-0.05	(1.35)	0.48

***: $p < .001$, **: $p < .01$, *: $p < .05$, +: $p < .1$

目では一般的他者よりも自己を有意に高く評価していたことから、本研究の調査1、調査2から得られた結果は宮本・上瀬の結果とほぼ一致していることになり、相対的自己高揚が本研究においても確認されたと言える。

性差について

Table 3は調査1、調査2における自己他者評定尺度の差得点を男女別に示したものである。調査1では「将来マイホームが持てると思いますか」の項目で男性のほうが女性よりも自己を一般的他者より有意に高く評価していた。調査2においてこの項目の差得点に有意な差は認められなかった。また「将来大金を手に入れる可能性があると思いますか」は調査1、調査2ともに男性のほうが女性よりも自己を他者より有意に高く評価していた。残り13項目は、いずれも差得点に有意な性差は認められなかった。

調査1と調査2の相関

調査1、調査2のいずれにも回答した合計121名の被験者を対象に、自己他者評定尺度の各項目について2度の調査で得られた差得点の相関係数を求めたものがTable 4である。得られた相関係数は.39～.73と中程度以上の相関を示しており、20項目す

べての相関係数が有意であった。さらに2度の調査で得られた差得点の20項目の合成値についてみると.80と高い相関を示していることがわかる。以上のことから自己他者評定尺度は繰り返しの測定によっても、評定値に大きな変化は見られないと言える。

考察

本研究は運・能力将来の出来事に対する(1)「自己」と「一般的他者」の評定から、相対的自己高揚が確認されるかどうか、もし確認された場合(2)相対的自己高揚は2ヶ月の間隔を開けた安定性が見られるかどうか、また(3)相対的高揚には性差が認められるのかどうかを明らかにすることを目的としていた。

調査1、調査2のいずれにおいても自己他者評定尺度20項目に対する自己評価の値を見ると、概ねニュートラルポイントである4点を上回っていた。このことは被験者の運や能力・将来の出来事に対する自己評価がポジティブであったことを示している。自己に対して否定的な値を示した項目を見ると、主に宝くじや懸賞などによって大金を手に入れられるかどうかという、いわば金銭運に対する期待を示すものであった。このことから人は一般に自分の金銭運に対する肯定的な展望を持っておらず、む

Table 3 自己他者評定尺度(調査1・2)の男女別差得点

	調査1		調査2	
	Male	Female	Male	Female
	MEANS (S.D.)	MEANS (S.D.)	MEANS (S.D.)	MEANS (S.D.)
将来マイホームがもてると思いますか	1.33 (1.72)	0.44 (1.43) ***	1.08 (1.40)	0.65 (1.36)
宝くじで大金があたると思いますか	-0.23 (1.57)	-0.46 (1.41)	-0.23 (1.28)	-0.50 (1.34)
幸せな老後を過ごせると思いますか	0.77 (1.52)	0.50 (1.38)	0.70 (1.55)	0.83 (1.17)
希望の進路に進めると思いますか	1.36 (1.48)	1.29 (1.15)	1.22 (1.45)	1.17 (1.31)
生涯友人に恵まれると思いますか	0.55 (1.67)	0.88 (1.33)	0.57 (1.48)	0.54 (1.13)
自分は魅力があると思いますか	-0.41 (1.90)	-0.54 (1.49)	-0.32 (1.56)	-0.69 (1.48)
何でもやればできると思いますか	0.59 (1.76)	0.48 (1.30)	0.36 (1.30)	0.29 (1.05)
結婚後5年以内に離婚すると思いますか	0.49 (1.74)	0.44 (1.53)	0.64 (1.55)	0.35 (1.36)
幸せな結婚ができると思いますか	0.49 (1.67)	0.45 (1.67)	0.46 (1.34)	0.29 (1.32)
才能のある子供に恵まれると思いますか	0.61 (1.44)	0.56 (1.18)	0.40 (1.17)	0.48 (1.22)
恵まれていると思いますか	1.39 (1.64)	1.35 (1.23)	1.24 (1.50)	1.19 (1.25)
自分に何か才能があると思いますか	0.00 (1.92)	-0.42 (1.70)	-0.22 (1.81)	-0.73 (1.58)
運がいいと思いますか	0.45 (1.83)	0.96 (1.46)	0.48 (1.60)	0.83 (1.65)
カンが鋭いほうだと思いますか	0.31 (2.04)	0.35 (1.60)	0.31 (1.72)	0.27 (1.70)
大きな病気にかからないと思いますか	0.74 (1.89)	0.58 (1.60)	0.31 (1.57)	0.38 (1.47)
85歳過ぎまで生きると思いますか	-0.58 (2.07)	-0.42 (1.75)	-0.39 (1.64)	-0.06 (1.29)
将来大金を手に入れる可能性があると思いますか	0.63 (1.90)	-0.04 (1.61)	0.40 (1.57)	-0.31 (1.03)
将来自分が交通事故の加害者になることがあると思いますか	0.11 (1.64)	0.50 (1.22)	0.02 (1.31)	0.42 (1.16)
出世できると思いますか	0.74 (1.62)	0.52 (1.18)	0.33 (1.46)	0.06 (1.17)
懸賞にあたると思いますか	-0.31 (1.56)	0.31 (1.30)	-0.14 (1.42)	0.13 (1.18)

***: p<.001, **: p<.05

Table 4 自己他者評定尺度の調査1・2の相関(N=121)

	r
将来マイホームがもてると思いますか	0.45 ***
宝くじで大金があたると思いますか	0.41 ***
幸せな老後を過ごせると思いますか	0.40 ***
希望の進路に進めると思いますか	0.47 ***
生涯友人に恵まれると思いますか	0.39 ***
自分は魅力があると思いますか	0.61 ***
何でもやればできると思いますか	0.40 ***
結婚後5年以内に離婚すると思いますか	0.46 ***
幸せな結婚ができると思いますか	0.48 ***
才能のある子供に恵まれると思いますか	0.48 ***
恵まれていると思いますか	0.58 ***
自分に何か才能があると思いますか	0.63 ***
運がいいと思いますか	0.62 ***
カンが鋭いほうだと思いますか	0.73 ***
大きな病気にかからないと思いますか	0.52 ***
85歳過ぎまで生きると思いますか	0.59 ***
将来大金を手に入れる可能性があると思いますか	0.65 ***
将来自分が交通事故の加害者になることがあると思いますか	0.31 ***
出世できると思いますか	0.60 ***
懸賞にあたると思いますか	0.51 ***
Total	0.80 ***

***: p<.001, **: p<.01, *: p<.05, +: p<.1

しろこの結果は、偶然などによって大金を手に入れる可能性は自分にはそれほどないという態度の反映であると考えられる。また「85歳過ぎまで生きると思えますか」という質問に対しても、否定的な評価がなされていたが、これは85歳という年齢が、比較的長寿を示すものであり、このことが一概に自己にとって肯定的な出来事ではない可能性が考えられる。長生きの基準について本研究では十分な検討を行わなかったが、長寿に対する肯定感が持たれる年齢が85歳よりも、低い年齢であったと予想される。

自己評価と一般的他者への評価を比較した差得点は概ねプラスの値を示しており、このことから相対的自己高揚が示されたと言える。これは同様の結果を報告した宮本・上瀬(1997)の追試に成功したことを示すものであり、相対的自己高揚が日本人、特に日本人大学生の自己肯定視を反映したものだと考えられる。

但し、相対的自己高揚の見られなかった項目を概観すると、概ね金銭獲得期待に関する内容、自己の才能や外見的魅力に関する内容となっている。また長寿に関する項目でも相対的自己高揚が認められなかったが、これはむしろ85歳まで生きるということが、被験者にとって決してポジティブな出来事ではないからだと考えられる。金銭獲得期待について相対的自己高揚が認められなかったことについては、宝くじなどで大金が当たる確率が被験者自身がかなり低く見積もっており、一般的他者という不特定多数の相手との比較の場合、自分に当たる確率がかなり低くなることを、比較的正確に認知していたからだと考えられる。一方自己の才能や外見の魅力でも相対的自己高揚が示されなかったが、才能や外見の魅力に対する自己評価は中点となる4ポイントを上回っており、比較的ポジティブな評価がなされている点が、金銭獲得などに対する評価と異なる点である。才能や外見の魅力については決して自分自身を否定的にとらえているわけではないが、それよりも一般的他者のほうがより才能があり、魅力があると認知していることは興味深い。帰属研究では多くの実験室実験で自己の失敗を能力に帰属することが報告されていたが、本研究で示された結果から、人は一般に自己の才能を否定的にとらえているわけではないが、一般的他者との相対的比較の中で自己が下位に位置づけられている点は日本人大学生の自己概念の特徴を示すものであると考えられる。

また自己他者評定尺度の差得点に対する性差は「将来マイホームがもてると思いますか」「将来大金を手に入れる可能性があると思いますか」の2項目で認められたただけであった。このことから相対的

自己高揚に対する顕著な性差は認められなかったと言える。しかし「将来マイホームが持てると思いますか」「将来大金を手に入れる可能性があると思いますか」の2項目は、いずれも男性において女性よりも高い相対的自己高揚が見られた。マイホームを取得することに対する強い願望は男性のほうが女性よりも強いと考えられる。これは将来家庭を持ちマイホームを取得するということが家族の中の父親に課せられた1つの役割であるということ強く意識した男性の性役割意識を反映したものではないかと考えられる。一方、将来大金を手に入れる可能性について性差が見られた点について、調査1では男性の差得点がプラス方向に偏ったことによる影響が予想されるのに対して、調査2では調査1と比べて男性の差得点が減少する以上に、女性の差得点が極端にマイナス方向に減少したことによる影響と考えられ、性差の意味が異なっている。従って本研究の結果のみからこの性差を十分に論じることはできず、今後、再検討が必要であると考えられる。

調査1、調査2の差得点の相関係数を見ると、すべての項目で正の相関を示したこと、また相関係数の値も中程度以上の値を示していたことなどから、相対的高揚が2ヶ月という期間をあけた場合にも比較的安定していることが示唆された。このことから、少なくとも相対的高揚が、不安定な個人内変数ではないと言えるだろう。自己他者評定尺度を因子分析したときの各因子が、自尊感情と正の相関を示すことも報告されている(宮本・上瀬, 1997)。近年、自尊感情を特性論的な視点から論じる場合もあるが(伊藤, 1998)、一般に自尊感情は、ある一時期の成功や失敗などによって変動する状況変数であると考えられている。こうした状況変数と相対的自己高揚が正の相関を示すということは、相対的自己高揚に見られる自己肯定視も、環境や状況の影響を受けることは十分に予想されることであり、今後十分な検討が必要である。但し、本研究で示されたように、2ヶ月という期間をあけても比較的高い相関が見られたこと、また相対的自己高揚が抑うつなどの精神的健康と関連していることは、今後精神的健康に対する各種の変数を検討する上で、相対的自己高揚が重要な影響を持っていることを示唆するものであると考える。

以上のように、本研究において相対的自己高揚が確認されたと同時に、相対的自己高揚が比較的安定した個人内変数であることが示唆された。ところで、多くの帰属研究では自己高揚よりも、自己卑下的な結果が多く見られたのに対して、本研究のよう

に明確に自己肯定的な結果が見られたのはなぜであろうか。この点について本研究では匿名的な状況の影響を指摘したい。帰属研究に見られる自己卑下的な結果は、実験室場面における課題達成的な状況で見られるものであったことは先述のとおりである。こうした状況では課題達成を暗黙のうちに被験者に対して強要する場面を作り上げていた可能性があり、この場合実験者に対する評価懸念などを被験者が持つてしまうことは十分に予想できることである。事実、匿名的な状況では自己卑下的な反応が消失したり、むしろ自己高揚的な反応が見られた古城(1980)の研究は、こうした指摘を裏付けるものであると考えられる。

最後になるが、本研究で示された相対的自己高揚が、認知的な影響なのか動機的な影響なのかということについては十分な検討がなされていない。たとえば Taylor & Brown(1988)は、肯定的幻想を自己概念の認知的な歪みによるものだと主張している。しかしながら相対的自己高揚が積極的な自己呈示方略としての自己表出であり、何等かの動機的な要因を持った現象だと考えることも可能である。但し本研究で用いた自己他者評定尺度は、評価懸念などの影響を取り除いた自己肯定視の自然な現れであり、自己呈示的な自己表出のような動機的な要因の影響はかなり少ないのではないかと考えられる。もちろん本研究の自己他者評定尺度の結果のみから、被験者の自己肯定的表出に対する動機的な要因が潜在的に存在しなかったということを見極めることは難しく今後十分な検討を必要とすると考えられる。

引用文献

- Allport, G. W. 1955 *Becoming: Basic considerations for psychology of personality*. Yale University Press.
- Brown, J. D. 1986 Evaluations of self and others: Self-enhancement biases in social judgments. *Social Cognition*, **4**, 353-376.
- Erikson, E. H. 1950 *Childhood and society* (2nd ed.). Norton.
- 遠藤由美 1995 精神的健康の指標としての自己をめぐる議論 社会心理学研究 **11**, 134-144.
- Fiske, S. T. & Taylor S. E. 1984 *Social Cognition*. Addison-Wesley.
- Fromm, E. 1955 *The sane society*. Rinehart.
- 伊藤忠弘 1998 特性自尊心と自己防衛・高揚行動 心理学評論 **41**, 57-72.
- Jahoda, M. 1958 *Current concepts of positive mental health*. Basic Books.
- 北山 忍・高木浩人・松本寿弥 1995 成功と失敗の帰因：日本の事故の分化心理学 心理学評論, **38**, 247-280.
- 古城和敬 1980 成功・失敗の原因帰属に及ぼす public esteem の効果 実験社会心理学研究, **20**, 23-34.
- Maslow, A. H. 1950 Self-actualizing people. A study of psychological health. *Personality, Symposium*. No. 1, 11-34.
- 宮本聡介・上瀬由美子 1997 ポジティブに歪んだ自己認知と精神的健康 日本社会心理学会第38回大会発表論文集, Pp248-249.
- Nisbett, R. & Ross, L. 1980 *Human inference: Strategies and shortcomings of social judgment*. Prentice Hall.
- Taylor, S. E. & Brown, J. D. 1988 Illusions and well-being: A social psychological perspective on mental health, *Psychological Bulletin*. **103**, 211-222.